

森槐南曰、下筆命意、極爲沈遠、後詩中幅、唯就其事蹟叙去、便覺雅音諧暢、非氣粗筆縱者之所

夢想

題放浪記用韓文公山石韵應木村竹南囑

同

倉○韻○作○字○其○旨○微○。無○端○鬼○哭○粟○雨○飛○。文○章○不○朽○稱○盛○事○。況○復○字○體○競○瘦○肥○。眼○中○一○卷○放○浪○記○。歎○息○世○間○知○亡○稀○。萬○里○幽○燕○携○筆○去○。俯○仰○感○慨○或○忘○饑○。寄○跡○津○門○論○時○勢○。七○十○二○沽○水○映○扉○。遠○上○長○城○勞○北○望○。艷○帳○想○他○雪○霏○々○。客○途○回○首○嫌○干○謁○。可○憐○病○骨○減○腰○圍○。一○片○耿○々○唯○如○此○。不○使○鑑○塵○染○素○衣○。日○月○跳○丸○風○雲○變○。身○小○膽○大○早○脫○鞵○。韓○柳○歐○蘇○千○載○士○。不○知○何○人○可○適○歸○。

森槐南曰、神怡氣靜、意甚雍容、

俳句

紫五吟社例會

短夜

躓きし馬にぞ驛は明け急ぐ 南 若

短夜や造る素焼に明け白む

逆襲の噂ばかりや明け易き 鬼菓子

明け易きホイロの煙壁を洩る 黙牛

水門の口に鳴る瀬や明け易き 青花

夜の漁の舟曳く濱や明け易き 江村

田の燈に虫の集いや明け易き

上り帆を呼ぶ下り帆や明け易き 水郷

麵棒に鼠打ちけり明け易き

更衣

近江蚊帳買へど来る日や更衣南若
 衣更へてサラ／＼と手紙認めぬ東籬
 札所四十印の衣を更へにけり溪林
 更衣長者が五人娘かゝ汀韻
 衣更へて敷石に立つ草の風青花
 少年の弓の譽や更衣水郷

芥子花

落日の鳴神遠し芥子の花黙牛
 家信には又友の計や芥子の花鷺絲

牡丹

京洛に嬌名の妓や白牡丹青花
 翠微檐に迫りて雨の牡丹哉
 廻廊の灯々や牡丹咲く黙牛
 牡丹散りて地に聲なし雲動く汀韻
 南殿の白砂眼を射る牡丹哉溪林
 裏は丘牡丹に名ある七温泉哉鬼葉子
 水浅き銀鱗に散る牡丹哉水郷

日傘

屋根の鳩日傘かすめて地に降る青花
 薬賣る白き日傘や文字多き溪林
 日盛を町に鹿追ふ日傘かな鬼葉子
 朱の鳥居鳥居朱の傘宮遠し黙牛
 樓にねて濱の日傘を敷へけり汀韻
 日傘して渡る二人や水の隈岸三
 髪容浪華見真似の日傘かな水郷
 練稚兒の後よりさす日傘哉

○

鬼葉子

鳴き連れて雁歸るなり風の朝
 親ならん子ならん雁の歸へり行く
 洲に乗りて動かぬ舟や芦の角
 芦の芽や半里の沼に寸の水
 藤綱が錢探がすなり芦の角
 闘鶏や源氏藤氏の公子達
 長安の手鐘なるなり鶏合せ
 鶏合す二尺の路地や暖かに